2016-12-01 資料―感想とコメント

1. 現在、ゼミの卒論のための研究を始めた段階で、白井聡さんのレーニン研究やスラヴォイ・ジジェク[1]の同様の内容の本を読んでいます。その中で一貫して論じるために出しているのが、現代の資本主義による社会構造や矛盾の露呈でした。恐慌（リーマン・ショック）や同時多発テロなど、サッチャリズムやレーガノミクスをはじめとする新自由主義路線を行っていく中で現れるマイナス面と、同時に進行するグローバリゼーションに対する反発？（移民への態度など）、現在では EU 離脱やトランプ現象などが挙げられますが、そういった社会の現在の問題とピケティの考えを読むだけで、こんなに明確に原因結果がわかるのだなと思いました。また、バーニー・サンダースの自伝も気になったので、買って読んでみたいと思います。

   ドイツ占領下での人々については、収容所やゲットーに閉じ困られた人々の話は、映画や小説などでもよくありますし、読んだりしたこともありますが、パルチザン組織など、抵抗運動を行った人の記録[2]をもっと積極的に読みたいと思いました。

2. ピケティのコラムの中の、得票数ではクリントンがトランプを上回っていたという事実には驚きました。州ごとに議席が一つ（？）[3]という制度は、しっかり国民の意見を反映させることができるのかと、選挙の仕組みの基本的な部分に疑問・気づきがありました[4]。

   また、国民は経済格差を何とかしてほしいという期待[5]でトランプ氏に投票したはず

---

[1] たくさんの仕事があり、翻訳もたくさんありますね。現代の世界資本主義をどのように変えていけばいいのか。アメリカでは、トランプ流右翼的方向とサンダース流民主社会主義の路線が対立的な方向性を示すものとして多くの支持者を得ていますが、それらに対して、ヨーロッパ、ユーゴの経験から何を志向するか、大変面白い問題だと思います。

[2] 多様な形態・さまざまのレヴェル（武装抵抗・敵の電線通信網の破壊などのサボタージュ行動から秘密・地下出版、その他落書きなど）の抵抗の在り方を調べてみることは、非常に大切なことだと思います。歴史（認識）が立体的に生き生きとしたものになるでしょう。

[3] 週ごとに選挙人の定数があり、周における多数党が、その週の議席をすべて取るという制度です。そこで、今回のような逆転現象が蒼きるのですね。講義の中で話しましたが、日本でも、小選挙区制度は、小さな選挙区ごとに、その選挙区で第一党になれば議席を取ります。小選挙区内で仮に第一党（日本ではこの間では自民党が多くの場合ですが）が 30%、20%などを取得するに過ぎなくても、つまり、70%とか 80%の人が第一党ではない政党（民進党とか共産党とかの野党）を支持していても、それらの政党がバラバラで 18%とか 10%とかの得票でバラバラになっていれば、70%や 80%の力を発揮できない仕組みですね。

   この小選挙区制に対して、違憲訴訟が数多く出され、違憲判決、違憲状態判決などが多数出ているのが、日本の現状です。にもかかわらず、選挙制度を変えようとしない政党が、支配政党となっているわけです。民主主義と議会制度が、乖離しているという問題が深刻です。現在の選挙制度で民意を反映しない多数派政党が、法律・予算を押し切ることができているのが、問題です。

[4] まさに、現在の民主主義の持つ重要な制度的根本的問題に「気づき」ましたね。

[5] この期待に真正面から答えようとしたのは、トランプではなく、サンダースです。ただ、サンダースは健闘したのですが、民主党の代表と離れませんでした。それで、屈折した形

なのに、低所得者を救うオバマケア（皆保険制度）を廃止するとしていることへの矛盾が、よく理解できませんでした[6]。オバマケア（の廃止）や法人税の引き下げという実際の政策内容よりも、民主党から共和党になることで「何かしら変化があるはずだ」という望み[7]の方に焦点を置いたのかと思いました。「国民の意見の代表」というよりも、「この人なら何とかしてくれるという最後の期待[8]」になってしまっている点が、ヒトラーに似た恐ろしさを感じました。

3. ユダヤ人をドイツから排除するというナチスの方針は、当初から抹殺を前提としていたのではなくて、国際関係の悪化でユダヤ人の流入を受け入れる国がなくなり[9]、一方で征服地域のユ
4. ユダヤ人は（占領地の拡大とともに）一層増えていくという状況の中で虐殺が決められたということが、今回の話を聞いて分かった。国際情勢のしわ寄せを受けるのはいつも社会的弱者であるというのは、現在もくぁっていないと思う。他人事ではないと思った。
5. オーストリアの亡命者の文書の出典は？実際の体験を文書であれ、読むことは、テキストのように客観的な記述のものと併せて読むと、より、ホロコーストをあらゆる角度か

で、トランプに流れたということはあると思います。必ずしも、ポジティヴにトランプを支持しているわけではないが、ヒラリーには期待できない、何とか現状を変えてほしいと。講義で紹介した沖縄県の翁長知事のトランプへの「祝電」の発想にも、こうした屈折した思いが読み取れます。

[6] まさに、「矛盾」です。しかし、矛盾する主張のうち、何が大衆の心をつかんだのか。どちらの主張が心をつかんだのか、これが問題でしょう。トランプのポピュリズム（大衆迎合主義）の宣伝が成功したということでしょう。せっかく、オバマケアが成立したのに、それを骨抜きにし廃止しようとする共和党の大きな流れがあるのだが、その重要な側面をトランプに投票した人々は見ないで、経済格差をナショナリズムで（保護主義・排外主義）でなくしていこうという主張が耳に入った、ということなのでしょう。

　ヒトラーのナショナリズムも、同じように、民族全体の繁栄を掲げ、その方針・政策に反するものとして国際主義（国際協調）を主張する勢力を「反民族的」、「反国民的」で「ユダヤ的なもの」として排撃していったわけで、その行きつくところは、戦争でした。ドイツ国民の悲惨と周辺諸国家・諸民族の悲惨とが、その結果でした。

[7] オバマ政権の 8 年間にも経済格差が縮小しなかった現実が、人々の不満を募らせていったという側面、さらに、オバマ政権 8 年間の金融規制の強化などに反対する金融界の不満、企業の海外への工場移転（経済主義・資本主義）に伴う失業の増加・雇用の喪失などに対する不満など、たくさんの不満が、背景にあったということでしょう。

[8] 実は、最終的には、幻想でしかなかったことが判明します。戦争全体の悲惨な体験を踏まえて初めて。

[9] 「国際関係の悪化」というのは、1933 年から 1939 年までで、39 年 9 月の開戦からは、戦争状態であり、単なる「国際関係の悪化にはとどまらない。しかも、戦争状態も、最初こそ、西部戦線で奇襲的電撃作戦でドイツが勝利したが、それが膠着する中、東方への侵略を開始したとき（広大な領域を支配する東方大帝国建設はヒトラーの一貫した戦略であり、それをいよいよ実行に移したということ）、すなわち独ソ戦の開始により、最初の数か月こそ前進に通津前進だが、次第に電撃的勝利の見込みはなくなり、さらに、敗退の様相を強めていく。これが決定的に重要な転換をユダヤ人追放＝移送政策にももたらす。ナチス・ドイツ敗退の蘇要因の累積こそは、足元のユダヤ人（最低へのの弱者に位置づけられたユダヤ人）の抹殺への決定的原因となる。

ら捉えることができることに改めて気づきました。生存者の高齢化などもあり、現在はそうした「生の声」が直接聞ける最後のチャンスであるように感じます。

6. 現地住民のナチスへの協力に関して学んで、そのようなことが行われたのは、ユダヤ人が憎いからなのか、欲望に従って取り除く相手として都合がよかったからなのか、相互的なのだと思いますが、どちらが先立つのか気になりました。集団として人間を見て個人が阻害されることの危険性を感じました。人間を自分の常識でくくって個々人を見ないから差別なども起こる[10]のだと思います。
7. 6 章を読み、当時のユダヤ人が直面していた恐怖は、占領軍だけでなく、その協力者も同様だと分かった。この事実を受け、なぜ協力者らは、協力者になったのか、人が人を殺すという許されざる行為[11]にすら参加しようと思ったのかが疑問だった。テキストには、「それは彼らがユダヤ人を憎み、ドイツ側の命令に黙々と従い、そしてユダヤ人の殺害に加わることから得られる物質的政治的な利益を得ていたから」とあったが、「憎む」という感情を特定の個人でなく、人種に抱くことも、私には分かりかねることであり、また、殺人によって利益が得られると期待する思考も分かりかねることだ。6 章を読み、ユダヤ人絶滅という結論に至ったヒトラーの心理と同様に、それに加担した人々の心理に関しても、気になった。
8. 『21 世紀の資本』を以前読んだのですが、やはりというか、少々文章が難しいと思ったが、危機感だけは強く感じる文章であり、アメリカだけではなく、日本、そして世界に発展するとされるこの出来事を受けて、今後、日本、そして世界の企業が来年、再来年どのような政策をとっていくのかということに注目すべきだと考えている。ナチやそれに似た政権が樹立したとき、経済はどのように変化したのか[12]、知りたいです。

---

[10] 差別の原因は、多様であるように思います。民族主義的差別は、集団としての民族による差別ですが、それ以外にも多様な差別があるのが現実です。

[11] 占領軍に協力する人々は、「殺人」という犯罪行為を行っていると意識していたでしょうか？「不穏なこと」、さまざまのそれまでの「怒り」などを、治安秩序・平穏を乱すもの（犯罪人）に対する処罰という意識で、行ってはいないでしょうか？　現地住民の協力を得ようとするドイツ治安当局・アインザッツグルッペは、自分たちの行為を正当化する論理回路をもっていたことは、前回述べた通りです。その意識は、「殺人」ではなく、「処罰」、「処刑」です。

[12] ナチの場合は、1933 年から 45 年の経済の変化を調べる必要があります。ナチ政権は、最初の 2 年間、秘密再軍備（軍備拡張を秘密裏に）を行い、35 年の春には公然とヴェルサイユ条約破棄・公然たる再軍備を宣言します。この軍備拡張は、恐慌期にどん底にあった重工業をはじめ、武器弾薬・戦車・航空機などを作る企業を活性化させ、雇用も拡大します。36 年には「完全雇用」状態になり、熟練労働者など不足してきます。また、鉄鉱石など重工業原料も不足します。外国から輸入するためには外貨が必要ですが、外貨を稼ぐための輸出は、世界経済の不況が続く中、伸び悩みます。外貨危機、為替危機が発生します。

こうした危機を乗り切るものとして、選書―諸なるに打ち出されたのが、自給政策＝アウタルキー政策です。しかし、この政策も思い通りには進展せず、ついに、武力的脅迫から武力行使に至る戦争へのと、突き進むことになります。

日本はどうだったか？満州事変から日中戦争へ、さらに太平洋戦争へと展開するなかで

9. 民主主義のあるべき姿とは・・・。冒頭、“ピケティのコラム”で先生がおっしゃっていたように、私自身も”民主主義の限界“を感じざるを得ないことが多々あります。最近では、特にクリントン氏の方が獲得票数を（多く）得ていたのにも拘わらず、獲得選挙人数で、クリントン氏 232 人、トランプ 290 人という差が出てしまった。一般投票で 130 万票以上の差をつけて勝利していたのにもかかわらず、という結果である。その結果、アメリカでは次期大統領トランプ反対運動が各地で勃発している。このように民主主義の中で、国民の意見と反することが、正統な理由[13]で起きてしまっている。ヒトラーと関係させてみると、ユダヤ人そのものが罪であり、反対する人も実際にいた（ドイツ人で）という話もありましたが、「罪あるもの処罰が正統である」という理由をつけられて、虐殺されていった。なんとも怖い民主主義、ナショナリズムであると感じた。また、「ユダヤ人を救ったドイツ人」に着目して調べてみるのも大変興味深い[14]と思いました。

の経済の変容を調べる必要があります。期末論文のためのいいテーマだと思いますが、いかが？

[13] 国民の意志を正確に「正統に」代表するという点では、制度に欠陥がある、ということです。日本の小選挙区制も、まさに、たくさんの「死票」がでるということで、大問題です。人々の意志をどれだけ正確に国会、地方議会等に反映させるか、この制度構築（現在の制度の変革）こそ、民主主義の実質を作り上げる上で、重要です。そのために、全国の弁護士などが、衆議院選挙や参議院選挙の「違憲」、「無効」を訴えて裁判を起こしています。まさに、民主主義を本物にしようとする理性的な運動です。

[14] 何冊かの翻訳が出ています。調べてみてください。期末報告論文のいいテーマです。